

高野秀行さん

ノンフィクション作家

たかの・ひでゆき ● 1966年生まれ。早稲田大学探検部在籍時に書いた『幻獣ムベンベを追え』（集英社文庫）で作家デビュー。「誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをやり、それを面白おかしく書く」がモットー。タイ国立チェンマイ大学日本語科、上智大学外国語学部での講師経験も。『謎の独立国家ソマリランド』（集英社文庫）で講談社ノンフィクション賞受賞。7月に新刊『イラク水滸伝』（文藝春秋）を出版。



PART 2

情報を伝えるための言語と 親しくなるための言語

言語の二刀流に目覚めた 私の「語学ビッグバン」

学生時代、ムベンベという幻の怪獣を探しにコンゴの奥地の村に滞在しました。その時です。私の中で、語学ビッグバンというべき現象が起きたのは。

今でこそ「学んだ言語は25以上！ 辺境ノンフィクション作家の超下級語学体験記」と帯で謳われた書籍『語学の天才まで1億光年』を出版するほどの言語マニアの私ですが、中高時代の英語は他教科同様、義務的に学習していただけ。ただ、雑誌『ムー』を愛読し、世界中を探検するという目標がありましたから、語学の必要性は感じていました。

念願叶って大学の探検部に所属したものの、私には特技や経験が何もありません。せめて片言の外国語くらいは話そうと思いました。そのためコンゴ遠征の際は、公用語の仏語に加え、現

地で使われるリンガラ語を習得して臨みました。すると、現地の人たちに思いのほかウケたんです。それまで各地で、英語や仏語を話しても反応は薄かったのに、そこでは簡単な会話をしたただけで目を輝かせてもらえることに、感じたことのない快感を覚えました。

そして確信します。言語には、「情報を伝えるための言語」と「親しくなるための言語」の二種類があると。この二つが備われば最強です。語学の二刀流を使いこなす喜びを知り、私の言語宇宙は一気に膨張することになりました。世界中どこに行くにしても、現地の言葉をゼロから学ぶ習慣がついたのです。

私のこの体験を基に、「将来、外国で仕事をする際は、英語だけでなく現地語を学ぶといいですよ」と勧めるのは簡単ですが、英語を学ぶだけで精いっぱいの高校生には荷が重いかもしれませ

ん。なので、こう考えてみてください。一つの言語の中にも、先ほどの二つの側面があると。例えば、機械翻訳の精度がいくら高まってもAIでできるのは「情報を伝えるための言語」の役割まで。通訳を通じた会話にも似て、デジタルを介したところで、相手と心が通じ合うまではいかないでしょう。

わかりやすい例がシリコンバレーです。なぜ多くのスタートアップがわざわざ集うのか。ICTのエキスパートだから場所を選ばずともいいじゃないですか。そうしないのは、同じ空間を共有し、無駄話や軽口など、どうでもいいことを話すことで関係性を築いているからだと思うんです。その際、共通語として使われることが多いのが英語であり、だからこそAI時代においても英語を学ぶ意味はなくならないと思います。

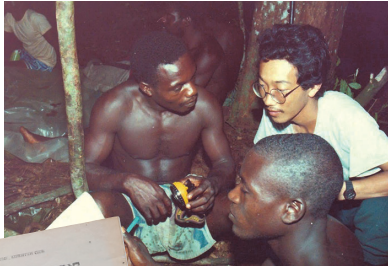
語学力の半分は 相手に委ねられている

語学ビッグバンに先立ち、私の語学観を変え、ちょうどした出来事がありました。自動車教習所の講義で教官がこう話してく



高野さんの印象に残る言語

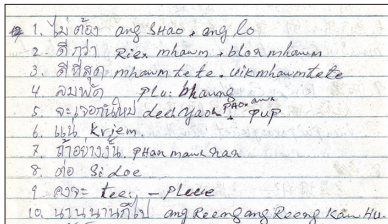
リンガラ語 (コンゴ)



高野さん自作の14ページからなる『突撃リンガラ語入門』。読み返すと今も30年以上前の記憶が蘇るとか。滞在先では、さらに、村の言葉であるボミタバ語まで学習。

撮影/伊豆倉守一

ワ語 (ミャンマー・ワ州)



「国家」の支配下に置かれたことのない不思議の地、ミャンマーのワ州。そこで話される言葉を、中国出身のワ人の牧師にタイ語で習っていた際の自作ノート。

ソマリ語 (ソマリア)



最も難しかった言語は、アフリカ東部で話されるソマリ語とのこと。助詞が動詞に付く変わった文法に苦戦。写真は「海賊の首都」と呼ばれるボサソで護衛兵士と。

れたんです。「皆さん、路上での運転が不安だと思いますが、大丈夫です。他のドライバーは皆さんより上手ですから、ぶつかりそうになったらよけてくれます」と。心が軽くなったとともに、外国語の会話も同じだと感じました。コミュニケーションは共同作業。こちらがたどたどしくても、相手がうまければきつと助けてくれる。そうでないとお話が成り立たず、向こうも困りますから。英会話講師を長く勤める知り合いのアメリカ人は、「ほとんどの日本人と英語で会話できる」と自慢げに話していました。相手の英語が下手でも、こちらがスピードを緩めたり、言い回しを変えたりすることで会話が成り

立つと言います。ということは、そのアメリカ人ががんばることで、ほとんどの日本人は英語を話せることになるんじゃないですか。では語学力って何なのか、という話になりますよね。個人の中にある絶対的語学力は、せいぜい半分ぐらいで、残りは、相手側にも左右される相対的なものだと思います。

ネイティブと非ネイティブ、グローバル英語を話すのは？

そういう私も、ネイティブの話す英語は聞き取れないことが多いんです。けれど、非ネイティブの話す英語に問題を感じたことはあまりありません。同様のことを語る非ネイティブは大勢います。知人の作家に聞いた話ですが、約40カ国の文学者がアメリカの地方に集まり、数カ月共同で創作活動をしたそうです。全員が非ネイティブで共通語は英語。それで問題なかったのに、たまに現地の人と交流するとき、その人の話す英語がみんなよく理解できなかったとか。非ネイティブ同士は意思疎通できるのに、ネイティブとだけはできない。こうなると、ますます語学力ってなんだと思ってしまう。

ちなみに、現在、英語を話す人は世界に15億人以上いて、その4分の3くらいは非ネイティブだそうです。となると、英語には2種類あるんじゃないか。インド人や中国人ほか、世界中の人が話す英語が数の上では「グローバル英語」であり、英米人やオーストラリア人が話す英語は、むしろ「ローカル英語」ではないかと。そう考えると、私たち日本人は、ネイティブの英語にこだわる理由がないと思うんです。友人のインド人やシンガポール人がよく「日本人はなぜアメリカ人やイギリス人の英語講師にこだわるのか」とこぼしていますが、他の言語はともかく、英語に関しては非ネイティブに習ってもいいと思います。

大切なのは伝わること。だから固有名詞が大事

話に戻します。「親しくなる」という点でも、実用的という点でも、語学を学ぶ際、私が最も重要だと考えているのは固有名詞です。知らない土地に行くと何が問題になるかという地名や人名、店名や食べ物の名前だと思っただけです。有名な例だとマクドナルドの発音です。誰もが知る店なのに、音が拾えないばかりに、何を話しているのか理解できない。逆に言えば、相手がマクドナルドの話をしているとわかれば、大体の内容は理解できるものです。

モチベーションを促す妄想語学のすすめ

大切なのは、伝えたいことがあるかどうか。その意味で、語学で大切なのは、何のために学ぶのかというモチベーションです。私の場合、「コンゴで幻の怪獣を探するため」とか「ソマリアの海賊の実

態を知るため」といった明確な目的があるため、必死です。

けれど、学校の授業にはそれがありませぬ。また、教科書に掲載された一般化された文章には、誰に対して何のために話すのか、という視点が抜け落ちがちです。普通、言葉を使う際は、町を歩きながらとか、ご飯を食べながらといったシチュエーションがあるわけで、何を話題にしているかなんとなく理解できます。ところが座学では頭の中だけで学ぶため、それができない。学校の授業というのはいっばん難易度が高いんです。

言語を学ぶということは、情景が浮かぶこと、または体で感じることです。リンガラ語で会話の練習をしているときは、彼方の存在だったアプリカが体の中に入ってくる気がしました。

今はICT機器の普及で動画を見ながら学ぶことも増えているでしょう。私なら、そうした機器を活用し、生徒ごとに架空の設定をつくってもらいロールプレイングするような授業をしてみたいです。いわば「妄想語学」。「ハリウッドに住みセレブ生活をした」という妄想であれば、物件探

しから始めないといけません。現地の不動産サイトを閲覧すると、驚くほど高額な家賃相場がわかります。そうやって楽しみながら学ぶわけです。

試しに私も、「義姉夫婦が住むシドニーでひと月居候する」というリアルな設定で妄想したところ、多くの気つきがありました。料理ぐらいいは手伝わねば、と思いい地図サイトで食料品店を探すと、近所に大きなスーパーのチェーンが5つあることがわかりました。それらを地元の人はどう発音するかもチェックします。YouTubeで買い物動画を視聴すると各店舗の商品を手取る動作について、take it, get it, もなく、grab という動詞を使うことも知りま

した。国によって言い方は違うかもしれません。でも、いいんです。なぜならシドニーで暮らす妄想をしているんだから。そういうふうしているうち、私は今、とつてもシドニーに行きたい気分になっています。

高校生に「将来、英語を使って何がしたい?」と聞いても、明確な答えが返ってくることは少ないでしょう。考えたことがないし、

言語化もしてこなかったからです。なので妄想でいいから行動に移すと、だんだん「本当にやったら面白そうだな」となるんじゃないか。あるいは友人の妄想を知ること、実はハリウッドセレブとかどうでもよくて、外国のアニメオタクと友達になりたいという欲求に気づくかもしれません。そうしたことが、語学学習に対するモチベーション形成の一助になれば、と思っています。

エンジニアリング的学習とブリコラージュ的学習

ブリコラージュという言葉をご存知でしょうか。フランスの文化人類学者レイイストロースが唱えた概念で、あり合わせの材料を使い、その場しのぎの手探りでモノを作ることです。

その対立概念がエンジニアリングで、決められた材料や道具を用い、定められた手順に従ってモノを完成させることです。

学校で行われる積み上げ式の語学教育がエンジニアリング的学習だとすれば、私のしてきたのは、まさにブリコラージュ的学習。身近にいるネイティブを捕まえてひたすらモノマネするなど、

今できる方法をフル活用して学び、しかも覚えるフレーズは「その謎の魚を見たら謝礼をあげるので連絡ください」とか、「身代金の相場はいくらですか」といった取材に直結したもののばかり。そして、目的を果たすと、いつの間にか忘れてしまうものだからです。

そうした学習法があつてもいいのではないか。あるいはエンジニアリング的学習との組み合わせが有効ではないか。その時々目的に応じて臨機応変に変えられるのがブリコラージュの強み。変化の激しい時代にこそ求められるのではと思います。


もちろん、体系的な学習が必要なことは言うまでもありません。特に、日本の英語教育においては、「読む」もしくは「書く」に関して、かなりの力が養われることが知られています。そうしたベースがあつて学び始める英会話と、なしのそれでは雲泥の差「聞く」「話す」についても一気に伸びていくはず。

思うに、語学ほど結果に結びつく学問はありません。そして、できないと思ひ込んでいたことが、できるようになる感覚は人間として、この上ない喜び

のはず。高校生にとつての語学って義務感の塊かもしれません。が、面白いものだとすることは知ってほしい。外国の人に食事をふるまうとき、deliciousやgoodよりも、「オイシイ」と言ってくれたら嬉しいですね。自分たちを受け入れてくれた感覚にもなるでしょう。それと同じことを相手にするだけです。今、日本に多くの外国人がいて、なかには怖そうに見える人もいるわけです。そういう人たちに、相手の国の言葉で挨拶するだけで、パッと顔が明るくなり、仲良くなれる。それは驚くべきことなんです。語学は、人の心を開く魔法の剣だと思えます。

語学の天才まで1億光年
(集英社インターナショナル)

英語、仏語、スペイン語、タイ語から、ケシ栽培の取材で滞在したミャンマー・ワ州のワ語まで、著者特有の言語観・語学観が満載。20代までの語学遍歴を綴った青春記でもある。コロナ禍で辺境取材ができない時期に執筆した入魂の一冊。



高野 秀行
語学の天才まで1億光年
語学×探検×青春!
学んだ言語は25以上! 辺境ノンフィクション作家の超ド級+語学体験記